

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720150

研究課題名（和文） モンゴル語の派生と複合の研究

研究課題名（英文） Derivation and Composition in Mongolian

研究代表者

梅谷 博之（UMETANI HIROYUKI）

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：60515815

研究成果の概要（和文）：本研究は、モンゴル語の主要な語形成手段である、派生と複合に関するものである。(1) 従来、派生接辞とされてきた接辞の中に、屈折接辞の特徴も有するものがあること、および、(2) 複合語として分類されてきたものの中に、構成要素間の結合度が「典型的な」複合語と比べて弱いものがあることを明らかにした。考察に当たっては、従来行なわれてきた形態に関する記述に加えて、音韻や統語など他の領域との関係にも留意した。さらに、(3) 「派生と屈折」「複合語と句」などの「区分」の妥当性についても検討した。

研究成果の概要（英文）：This project has dealt with two major processes of word formation in Mongolian: derivation and composition. The following two points have been clarified by conducting descriptive research from phonological and syntactic as well as morphological perspectives: (1) Some of the suffixes classified as derivational suffixes in the literature actually also exhibit inflectional characteristics, and (2) the cohesion between the two constituents of some “compounds” is not as tight as that observed in typical compounds. Furthermore, (3) the validity of demarcations concerning derivation and composition, such as “derivation and inflection” and “compound and phrase”, has been considered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：モンゴル語、形態論、語形成、派生、複合、屈折、記述言語学

1. 研究開始当初の背景

モンゴル語の派生と複合に関する研究の多くは、主に次の3つの観点から行なわれてきた。

(1) 品詞の観点からの記述：派生に関しては、個々の派生接辞がどの品詞語基に付き、どの品詞に属する語を形成するかについて。

複合に関しては、どの品詞に属する2つの語が複合し、どの品詞に属する語を形成するかについて。

(2) 意味に関する記述：派生に関しては、個々の派生接辞がどのような意味をもつ語を派生するかについて。複合に関しては、形成された複合語が表す意味についての傾向

の指摘（複合名詞は動植物や色彩、方角を表すものが多い等）、及び、構成要素間の意味的關係に着目した分類（並列複合語と限定複合語の区別）。

(3) 形態的特徴に基づく分類：派生に関しては、**active root**（屈折接辞をとる語幹としても用いられる語根）と**bound root**（屈折接辞を直接付加することができず、派生接辞の付加を要する語根）の分類。複合に関しては、屈折接辞を含む複合語（日本語の「菜の花」のように形としては句であるが、意味が固定化している点で複合語に分類されるもの）の存在の指摘。

このように、先行研究の多くは派生語や複合語そのもの、あるいはその構成要素間の關係に着目し、多くの事実を明らかにしてきた。しかしその一方でこれらの研究は、派生や複合を他の言語現象から切り離して記述したものであり、派生・複合と音韻・統語との関わりについては、ごく簡単な記述が見られるに過ぎなかった。

こうした中、1990年代以降になって、複合語の音韻的特徴を個別的な例について指摘した研究、重複のし方によって複合語を結合度の観点から区分した研究、複合語を句から区分する基準を提唱した研究などが見られるようになった。このように、語形成をより広い現象との関連で観察しようとする重要な研究がいくつか見られるようになってきたが、詳細に分析すべき現象はまだ多く残されている。

2. 研究の目的

派生・複合をモンゴル語の体系全体の中で分析しようとする、1990年代以降に見られるようになった研究を発展させ、様々なタイプの派生語、複合語について記述することを目的とした。記述に当たっては、従来の形態、意味の観点からの観察の他、音韻や統語の領域と関連づけて分析することを目指した。また、「派生と屈折」「複合語と句」など、派生や複合に関わる基本的な区分が先行研究で提唱されているが、そのような区分を明確に行なうことが実際に可能かどうかを検討した。

3. 研究の方法

あらかじめ調査票を用意し、モンゴル語話者に対して聞き取り調査を行なうことでデータを得た。日本国内で調査を行なった他、まとまったデータを入手するため、年1～2回モンゴル国に渡航した。1回の渡航につき2～4週間程度調査を行なった。

また、聞き取り調査を補助する目的で、コーパスを用いた。コーパスは延べ25万語程度の小規模のものであるが、聞き取り調査を

実施する前に用例を検索し、言語事実を大まかに把握するために用いた。

4. 研究成果

(1) 典型的な派生接辞とは異なる性質を持つ、次の3つの接辞について記述した：**-član**「～のような」、**-taj**「～持ちの」、動詞から名詞を派生する接辞**-lt**。

①接辞**-član**「～のような」の存在自体は先行研究で指摘があるものの、詳細な記述は見られなかった。本研究の結果、**-član**は派生接辞としての特徴を有すると同時に、「代名詞に付く」「一部の後置詞に付く」「動詞の形動詞形（連体形）に付く」といった点で、屈折接辞である格接辞と共通する特徴を有していることが分かった。これらの事実から、**-član**は、ある点からは派生接辞に分類できるが、別の点からは屈折接辞に分類できると言える。

②接辞**-taj**は、「～と一緒に」という意味を表す場合と、「～持ちの」という意味を表す場合がある。従来のモンゴル語研究では、前者の**-taj**は屈折接辞（共同格接辞）として扱われ、後者の**-taj**は派生接辞として扱われることが多い。

しかし本研究での考察の結果、2つの**-taj**を区別する根拠として先行研究で挙げられている基準のいくつかは、そもそも議論とは無関係であることが分かった。さらに、2つの**-taj**を異なるものとして扱う理由の1つとして、屈折接辞**-taj**の後ろには再帰接辞が付くことができるが、派生接辞**-taj**には付かないことが先行研究では挙げられている。しかし観察の結果、派生接辞**-taj**にも、再帰接辞が付いていると考えられる例が存在することが明らかになった。これらのことから、**-taj**には屈折接辞と派生接辞の2種類あるとする従来の分析を、部分的に見直す必要があることが分かった。

③動詞から名詞を派生する接辞**-lt**の特徴を記述した。接辞**-lt**は先行研究で派生接辞に含められているものである。しかし本研究の結果、**-lt**が、形動詞語尾とよばれる動詞の屈折接辞と共通する特徴を持っていることが分かった。**-lt**が有する形動詞語尾的な特徴は次の通りである。1つ目は、モンゴル語には動詞の直前に現れる否定小辞が存在するが、**-lt**により派生した名詞は、この否定小辞を取ることができる点である。2つ目は、**-lt**が、統語的単位である「句」に付く次のような例が存在する点である。

- a. **usan-d sele-lt**
水-与格 泳ぐ-lt
「水泳」（直訳すると「水で泳ぎ」）

(2) 一般に、典型的な複合語では、前部要素と後部要素の結びつきが強固であるとされている。しかし、先行研究で複合語とみなされている形式の中には、各要素間の結びつきが典型的な複合語ほどは強くないものがあることが分かった。そのようなものには、「動詞+動詞」、「名詞+動詞」、「動詞の直前に現れる preverb とよばれる要素+動詞」の組み合わせなどが含まれる。

例えば、これらの組み合わせの2つの構成要素間には、自立語が入り込むことができない。その点では、要素間の結びつきは強いと言える。しかし、/「しか」や「も」などの小辞は入り込むことができる。その点では、要素間の結びつきは弱いと言える。

また、これらの組み合わせのうち、「名詞+動詞」に関して、統語的な操作を加えた場合に起こる現象を観察した。その結果、「名詞+自動詞」を使役化した場合に、元の文で主格で現れていた主語名詞句(例bの *Bat*)が、使役文では(被使役者を表す名詞句として)対格で標示される(例cの *Bat-yg*) ことなどが分かった。

b. *Bat uxaan or-son.*
 (人名) 意識 入る・過去
 「バトは意識を回復した」

c. *Emč Bat-yg uxaan*
 医者 バト・対格 意識
or-uul-san.
 入る・使役・過去
 「医者はバトの意識を回復させた」

(3) 各要素間の結びつきがさほど強くない形式をどのようなものとして認めるかという問題を解決するためには、派生や複合だけではなく、モンゴル語の全体像を視野に入れる必要がある。そうした、全体像を見る過程の中で、「後置詞」とそれに先行する名詞の結合度を記述した。

記述に当たっては、「後置詞の母音が直前の名詞の母音と調和するかどうか」、「後置詞が直前の名詞と一体となつて一つのアクセント単位をなすかどうか」、「後置詞の直前に現れる代名詞の語幹が交替するかどうか」、「後置詞とその直前の名詞との間に小辞が入るかどうか」などの観点から観察した。その結果、後置詞とその直前の名詞の結合度は、個々の後置詞によって異なり、屈折接辞と同程度に自立度が低い「後置詞」から、自立語に近い「後置詞」まで、さまざまなものがあることが明らかになった。

(4) 今後の展望: 上の(1)~(3)の研究成果から、「派生と屈折」「複合語と句」「屈折接辞と後置詞」のように、従来区別されていた2つのカテゴリーが、実際にはさほど明確には区分できないことが明らかになった。

複合語と句の中間的な存在である「動詞+動詞」「名詞+動詞」「preverb+動詞」などの組み合わせを例に取ると、これらを自立度の観点からどのようなものとして認定するかについて、例えば次のような立場があり得る。

- ・(結合度がやや弱い側面があるものの) 複合語と認める立場
- ・(結合度が強い側面があるもの) 句として認める立場
- ・複合語でも句でもない、新たなカテゴリーに属するものとして分類する立場
- ・ある特定のカテゴリーに分類することは不可能であるとして、分類を保留したままにする立場

こうした様々な立場のうち、どれがモンゴル語の記述にとって最適であるかを決定するためには、そもそもどのような特徴を有するものを複合語(あるいは句)とよぶかが決まっていなければならない。これについては、本研究では明確な答えを出すことができなかった。

この問題の解明のために、複合語と句の中間に存在するような他の諸形式の記述を、今後も続ける必要がある(上述のことは、「複合語と句」という区分を例に取って述べたもので、「派生と屈折」「屈折接辞と後置詞」についても同様のことが当てはまる)。

また、派生や複合に関する区分だけにとどまらず、モンゴル語における他のさまざまな「区分」をどのように行なうことが、モンゴル語の記述にとって最適であるかについても、考察を進めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①梅谷博之、「モンゴル語の所有を表す接辞」、『北方言語研究』、査読有、第2号、2012年、pp. 47-72、<http://hdl.handle.net/2115/49252>

[学会発表] (計4件)

- ①梅谷博之、モンゴル語における preverb と動詞との間の結合度、日本語学会第146回大会、2013年6月15日、茨城大学
- ②UMETANI Hiroyuki, Mongol xelnij ner üg, es tusax üjl üg xojoroos büreldsen xellegüüdiijn zarim onclog, 10th International Congress of Mongolists, 10 August 2011, National University of Mongolia, Mongolia
- ③UMETANI Hiroyuki, Characteristics of

the derivational suffix *-član* in Khalkha Mongolian, 10th Seoul International Altaistic Conference, 17 July 2011, Sunchon National University, Republic of Korea

- ④梅谷博之、「モンゴル語の「後置詞」の特徴」、日本語学会第141回大会、2010年11月27日、東北大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅谷 博之 (UMETANI HIROYUKI)
東京大学・人文社会系研究科・研究員
研究者番号：60515815

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：